

ディーツゲンの社会理論とカント批判 (2)

針 谷 寛

目 次

1. 認識論と社会主義
2. 「頭脳労働」の世界におけるカント批判
(以上『一橋研究』第6巻第4号1982年1月)
3. 労働概念の展開
4. 市民社会批判における理論と実践
(以上本号)

3. 労働概念の展開

これまで検討してきたことから、さしあたり次のようにいうことができる。ディーツゲンの思惟理論には、カントの叡智的实践原理にたいする批判方法として、たんなる認識問題を越えた方法的意図がこめられていた。しかしこのような問題構成のもとで展開された思惟理論は、理性を経験的認識能力に還元する実証主義的傾向をとめない、そのかぎりにおいて人間の思惟は、実践原理へのかかわりを含まぬ観照的認識に帰着せしめられることになった、と。

しかし重要なことは、ディーツゲン自身のうちに、このような認識論の枠を超えて、思惟を、社会的存在の構成要素としてとらえていく視点が存在したという事実である。それは、労働概念を基礎とする社会理論のなかに、思惟を「頭脳労働」として組み入れようとするところみであった。『人間の頭脳労働の本質』で展開された思惟理論それ自身、すでに——その書名も示唆しているように——労働論を基底とする全体構想をそれなりに前提していたといえる⁽¹⁾。だが、「頭脳労働」が実践⁽²⁾のなかでもつ意味は——彼の思惟理論との一定の方法的断絶をとまな——社会理論の展開においてはじめて追究

されえたのであった。そこでは、労働の社会化を、頭脳労働と肉体労働の分離の克服という観点のもとで把握することが、ディーツゲンの社会主義観の基礎となっていく⁽³⁾。そして、カント二元論を克服する可能性も、人間の実践を、労働を基礎に把握したこの社会理論においてこそ開かれたのである。そこで、以下において、ディーツゲンにおける労働概念の広がり进行を考察しなければならない。

ディーツゲンの労働概念は、感性的欲求的存在としての人間把握を基礎にもつ。彼によれば、「この大地の上で飢えをいやし、身に衣服をまとい、われわれの多様な力をすべて発展させる欲求」が「人間の本性」に属している⁽⁴⁾。こうした把握から出発して、彼は労働を、根本において「精神的であると同時に肉体的」であるものとしてとらえる⁽⁵⁾。頭脳労働と肉体労働とが社会的分業をとげている場合でも、「二つの労働形式の相互浸透」こそが人類の発展を押し進めたとされる⁽⁶⁾。人間は感性的活動をとおして自己の目的を実現するが、それは対象的連関にたいする技術的態度を媒介とする。そのかぎりでは、「ある概念的企図を実現するということは、『神的創造』とはほど遠いことである⁽⁷⁾」。

労働のうちに、ディーツゲンは、歴史的世界を形成する主体的原理を把握する。人間は「歴史をつくる」。歴史の発展とは、「見出しうるすべての素材を人間の欲求に役立て、自然を開発し、われわれの精神によって世界に体系をもちこむ」点にあるとされる⁽⁸⁾。その意味で彼は、歴史を、人間が労働をとおして直接的自然規定性を克服し、社会的存在の世界を形成する過程とみなしているということができよう。あるいはこういうこともできる。彼は、歴史世界の存在論的独自性を、労働による自然の開発 *Kultivieren* をとおして形成される「文化」*Kultur* としてつかんだのである⁽⁹⁾、と。ところでディーツゲンによれば、人間の自由とは、歴史過程において「自然を人間精神の支配下におくこと」に存する⁽¹⁰⁾。彼は、労働のうちに自由と必然との媒介を求めることによって、自由を本質的に歴史的なものとして把握するのである。このようにして、ディーツゲンは、諸個人の意志の自己規定に自由を求めたカント自由論の抽象性を——実践原理の転換をとおして——克服していく。

労働は、諸個人を社会的に結合させ、共同性を成立せしめる原理でもある。

「人間社会をつぎ動かし結合させるものは、労働の経済である⁽¹¹⁾」。そもそも自然を支配するために人間は自己を組織化せざるをえないのである。ディーツゲンにおいて、「労働の組織化」ないし「共同的労働」とは、歴史において生成する社会的存在の根源的な存在の仕方の意味する概念とみることができる⁽¹²⁾。社会的共同性のこのような把握は、一面では、共同性を意志規定の普遍性からアプリアリに基礎づけたカント哲学への批判となる。しかしそれと共に、社会的共同性の本質構造を実践をとおして把握するかぎりにおいて、それはカントの継承ともみなしうる。以上のようなディーツゲンの労働概念は、彼の次のことばに総括されているといつてよい。「労働の組織化が全文化の基礎をなす。……歴史一般、あらゆる発展、……人間性の全体が、この源泉から生じたのである⁽¹³⁾。」ディーツゲンは、こうして労働の社会化の把握を基軸に、歴史を人間の自己産出過程としてとらえ、社会的対象性の総体を主体的産出活動の所産として把握していく。

この自己産出過程のうちにディーツゲンはひとつの転倒構造をつかんでいる。社会的共同性の基礎が労働の社会化にあり、労働の社会化も根源的には自然支配の必要に立脚するものであるかぎり、生産力の論理が人間の社会的諸関係のなかに浸透する。自然の人間化は、歴史世界における独自に客観的な社会的諸関係の形成をとまなうのみならず、こうした諸関係が主-客転倒的に自立する可能性をも孕んでいる。彼は、このような転倒が過去の歴史を貫いていたと考える。「従来の文化の内実は人間労働の生産力の進歩という点にある。生産力が駆動因であり、人間も、その歴史的諸変化もたんに生産力発展の契機であったにすぎない⁽¹⁴⁾。」ところで、このような転倒における社会的共同労働は、本能的に営まれているだけで、意識性、頭脳労働を欠いているということが出来る。ここにいう意識性とは、労働の技術的側面にかかわるものではない。

「従来の社会的経済が自己の形態を組織したさいの意識の欠如」という意味での意識性である。そのような意味で彼はこうした転倒形態を「頭脳なき経済」*Kopflose Wirtschaft* と特徴づけるのである⁽¹⁵⁾。

過去の「無意識的」社会化形態も、それが生産力を発展させる「不可欠の手段」であったというかぎりにおいては正当化されうる⁽¹⁶⁾。しかし他面、ディ

ーツゲンは、剰余労働の搾取によって、労働主体を富の享受から切り離れた社会形態は、まさにその無意識性を克服することによって揚棄されねばならないと考える。たしかに彼は、所有関係への視点を抜きにこれらのことを論じているわけではなく、また共同性の意識的組織化の条件として、生産手段の所有の社会化を主張している⁽¹⁷⁾。しかし彼にとっては、社会化の無意識性の克服という点にこそ社会主義の本質がある。そこに生産の無政府性の克服が含意されていることはいうまでもない。しかし、彼が社会民主主義とは経済を意識をもって組織化する「頭脳労働」である、と特徴づけるとき⁽¹⁸⁾、見落されてならないことは、それが肉体労働者自身の担う頭脳労働であるとされていることである。したがってそれは経済の計画的組織化の段階においてはじめて問題になるのではなく、むしろ労働者の意識化の過程が革命の過程と解されるのである。「資本論書評」においてディーツゲンは、このような肉体労働と頭脳労働との統一の意義を強調して次のように述べている。労働者が「自分で考えること」に熟達しなければ救済はない。労働者が「他人から教えられることに甘んじているかぎり、こうした精神的優位から抜け目なく物質的利益をひき出す人間もいなくなりはない」。したがって、「自分の階級の自己救済に協力しようとする労働者に最初に求められることは、ひとから教えられることに甘んぜず、みずから知ること」である。とはいえここでの問題はもはや抽象的思惟理論の枠組のうちにとどまるものではない。まさに「資本を知ること」こそ「ひとりひとりが担わねばならない普遍的階級利害」なのであった⁽¹⁹⁾。

以上、社会理論への広がりにおいてみると、ディーツゲンは、理性から労働への実践原理の転換をとおして、カント二元論にたいする本質的な批判にふみこみえているとすることができる。対象的世界を因果的必然の支配する自然として認識する理論と、内的意志規定における自由な行為というカント二元論の構造を拒否して、ディーツゲンは、感性的活動を基礎とする主体-客体関係をとおして、社会的総体を人間の自己産出過程としてとらえる。こうした把握のなかで、「頭脳労働」は、技術知をうちに含みつつも、より根本的には、社会の総体的認識として自己認識を意味することになる。理論と実践の二元論にかわって、労働にもとづいて人間が形成し、かつそのなかで人間が形成される

実践的歴史世界と、その自己認識とが登場する。

ここまでみてくると、われわれはふたたびディーツゲンの思惟理論の投げかける問題へとひきもどされる。すなわち、こうした実践的世界の自己認識と、彼の思惟理論における認識規定とはいかなる関係に立つのか。とりわけ、現実の構造そのものを変革する実践が理論にもとづくといわれるとき、その理論はいかなる性格において解されるのだろうか。ドイツ社会民主主義の成立期に、その「科学性」を強調したディーツゲンについて、こうした点を、カント批判とのかかわりで検討するならば、問題は、後のカント主義的両極分解にたいして一定の先取りの意味を示すことになるだろう。

(注)

- (1) たとえば『頭脳労働の本質』の執筆時期と重なる1868年春の一論文において、彼は、頭脳労働と肉体労働の関係把握の問題に論及している。Vgl., Dietzgen, *Die Wissenschaft und das Handwerk*, in: *Beiträge zur Geschichte der Arbeiterbewegung* (以下 *BzG.* と略記), Jg. 15, 1973, Heft 1, S. 92-95.
- (2) ここで実践は、労働として、および労働一般に還元されぬ革命的実践としての両義において問題となる。
- (3) ディーツゲンにおける頭脳労働と肉体労働の分離の批判が共産主義理論にたいしてもつ意義を強調したものに、Hellmut G. Haasis, Nachwort, in: Joseph Dietzgen, *Das Wesen der menschlichen Kopfarbeit und andere Schriften*, Darmstadt u. Neuwied 1973, S. 177-223, がある。ハージスの場合この問題は、ディーツゲンの思惟理論との統一性においてこそ意味をもつと解されている。彼によれば、ディーツゲンの意義は、その認識論によって商品生産社会の思惟形式(抽象的普遍の物神化)を批判し、生産様式、政治組織、革命モデルの全体にわたってブルジョア的思惟の克服をうち出した点に求められる(vgl., *ibid.*, bes. S. 187-190, 196-197, 211.)。こうした評価は、パネクークラレーテ共産主義者におけるディーツゲン認識論の受容の問題につながるものであるが、この問題の検討は本稿の枠を超えており、別の機会に俟ちたい。
- (4) Dietzgen, *Die Religion der Sozialdemokratie*, in: *Der Volksstaat*, 10. Mai 1871.
- (5) *Ibid.*, 5. Aug. 1874.
- (6) *Ibid.*, 6. Mai 1871.
- (7) Dietzgen, *Briefe über Sozialismus an eine Jugendfreundin*, in: *Josef Dietzgens Gesammelte Schriften*, hrsg. v. Eugen Dietzgen, Berlin 1930 (以

下 *Gesammelte Schriften* と略記), Bd. 3, S. 250.

- (8) Dietzgen, Die Religion der Sozial=Demokratie, in: *Der Volksstaat*, 2. Aug. 1871.
- (9) Vgl., *ibid.*, 6. Mai 1871.
- (10) *Ibid.*, 17. Aug. 1870.
- (11) Dietzgen, National=Oekonomisches. Ein Vortrag, gehalten in der Gesellschaft für wissenschaftliche Unterhaltung in Siegburg, in: *Der Volksstaat*, 5. Jan. 1870.
- (12) ディーツゲンにおける“Organisation der Arbeit”を社会科学的意味に限定して「生産諸関係」の言い替えとみる解釈もある。Vgl., Gerhard Huck, *Joseph Dietzgen (1828-1888), Ein Beitrag zur Ideengeschichte des Sozialismus im 19. Jahrhundert*, Stuttgart 1979, S. 86.
- (13) Dietzgen, National=Oekonomisches, in: *Der Volksstaat*, 1. Jan. 1870.
- (14) Dietzgen, “Das Kapital.” Kritik der politischen Oekonomie von Karl Marx. Hamburg 1867 (以下 Kapital von Marx と略記), in: *Demokratischen Wochenblatt*, 5. Sept. 1868.
- (15) Dietzgen, National=Oekonomisches, in: *Der Volksstaat*, 5. Jan. 1870.
- (16) *Ibid.*
- (17) Vgl., Die Religion der Sozialdemokratie, in: *Der Volksstaat*, 10. Mai 1871.
- (18) *Ibid.*, 20. Aug. 1870.
- (19) Dietzgen, Kapital von Marx, in: *Demokratisches Wochenblatt*, 1. Aug. 1868.

4. 市民社会批判における理論と実践

フランスの二月革命は「労働の組織化」を旗印にかかげた。しかし労働はとうの昔から組織されている。したがって、「社会主義の要求は労働を組織化することではなく、むしろ組織の現在の形態を変更することにこそある⁽¹⁾」。——ディーツゲンがこのように主張するとき、すでにふれたように、その根底には現存形態の「無意識性」の克服要求があった。だが、さしあたり注目されるべきことは、ここにおいてディーツゲンが、現実世界の自己再生産的構造、彼のことばによれば、「ひとつの個性的、構造的全体⁽²⁾」そのものを変更する実践に直面しているということである。このような社会革命としての実践の道を開こうとするとき彼がカント的実践概念の「彼岸性」との対決を企図したのであ

るとすれば、それは理論的にも、また時代的にも首肯しうるところであろう。だが彼の思惟理論におけるカント批判によっては、この実践の問題性は依然として残されたのであった。実践原理は理論的に認識される現実のなかにあつて、これに働きかけうるものでなければならない。また理論はそのような現実の構造を把握するものでなければならない。その意味で、ディーツゲン自身、理論と実践の統一可能性を示しえねばならないのであった。

ディーツゲンは「科学的社会主義」と題する論文において、今日の社会主義は「歴史の運動の認識」および「具体的に現存する事実の認識」にもとづくものであると強調している⁽³⁾。だが問題は、理論的認識にもとづくということの内実、その理論のあり方のいかにこそあるといわねばならない。なぜなら、その理論が「歴史の運動」や「事実」というものをふたたび「自然」として把握するのだとすれば、実践もまた「技術的」なものと「道徳的」なものへのカント的両極分解をまぬがれえないからである⁽⁴⁾。ところでディーツゲンは、すでにみた彼の労働概念からもうかがえるように、歴史の歩みを認識するといっても、それを「発展法則」としてつかみ、それに技術的態度をとることを主張しているとはいえない。たとえ、時代的にドイツ社会民主主義において実証主義、「宿命論的—決定論的」傾向が次第に強まり⁽⁵⁾、またディーツゲン自身が、時にそれに類したことを語っているとしても⁽⁶⁾、彼の理論の基本性格をそこにみることは単純化の謗りをまぬがれないであろう。現存社会のうちに、それが「永遠の真理」ではなく、「歴史的要素」を含むものであることを証示すること⁽⁷⁾——そこに理論の課題があるということを彼はたしかにマルクスから汲みとっていた。ディーツゲンにおける理論の「科学性」と実践的なものとの接点を、方法論的一貫性において再構成することはかならずしも容易なことではない。ここでは、いくつかの手がかりをたぐりよせつつ、問題に接近していきたい。

ディーツゲンの社会認識の出発点は商品生産社会の直接的現象形態である。そして、彼が何よりもマルクスに「学ぶ」点とは、「われわれの生産の私的経営は生産の社会的、共同的本質を隠している形式にすぎないこと」であった⁽⁸⁾。彼は、まず、次のようにして、労働の「共同的本質」をつかむ。「われ

われがただ間接的にのみ自己の労働生産物によって、しかし直接的には国際的な労働生産物によって生活していること……から明らかのように、われわれは孤立した労働によってではなく、共同的な社会的労働によって生産している⁽⁹⁾。」このように「経験的」な道すじでつかまれた共同的労働の概念は、しかし、ディーツゲンの場合、現実の抽象的一規定として思惟的再構成の一契機に組みこまれるのではなく、むしろ存在論的な規定として自己を主張することになる。そして彼の実践原理としての労働概念全体が、この商品生産社会の現象からの抽象に、そしてその存在論的意味転化に立脚していたのである。後論への前提の意味においてもここでマルクスとの相違をみておこう。ディーツゲンのこの論理の原型になっていると思われるマルクスの、商品生産者の私的諸労働の社会的性格に関する分析をみるならば、そこでは私的諸労働の社会的性格が「二重の社会的性格」として——すなわち(1)社会的分業の分枝としての社会的な有用性と、(2)異種の労働の同等性という社会的性格として——分析された上で⁽¹⁰⁾、この対立的両側面（使用価値的、価値的）の関係が、経済的形態規定として展開されていく。ディーツゲンにおいては「二重の」社会性が概念的に未分化のまま共同的本質として原理化される。したがって、彼の論理がマルクスの使用価値—価値の関係規定から離れて自立するかぎりにおいては、その労働概念にもかわらず、あるいはむしろこの概念ゆえに、資本制生産関係としての固有の構成は崩れざるをえなくなるのである。

さらに、商品の物神性に関するマルクスの見解を下敷きとして、ディーツゲンはいわば商品論のレベルで市民社会の転倒性をつかむ。「自分の生産物を貨幣に変える者は、その個人的労働を共同的労働に転化させる。……貨幣は神秘的に物に転化した社会である⁽¹¹⁾。」こうした転倒のうちに、彼は市民社会における共同労働の無意識性をみる。そこでは人々はその無意識性ゆえに、共同性 **Genossenschaft=Bruderschaft** を、「直接的に共産主義的に実現するかわりに、ねじれた形で生産物に付与する」のだとされる⁽¹²⁾。このようにして市民社会を、商品論のレベルでおさえ、共同性が物に転化されることによって成り立つ「間接的共同体」⁽¹³⁾として把握するディーツゲンの見解には、マルクスの理論をきわめて生き生きと汲みとりつつ⁽¹⁴⁾、なおそこに同化しきるこ

とのないディーツゲンの思考の特徴が表われているのであるが、その点にはもう一度立ちかえることにして、彼の資本制生産の把握に移ろう。

「今日の労働の固有の形態は……資本との関係においてのみ認識可能である⁽¹⁵⁾」、とディーツゲンも述べているように、彼の市民社会認識は原理的には資本制生産社会としての認識である。そして彼にとっても市民社会の歴史的有限性が把握されるのは資本の論理をとおしてであった。「生きた賃労働」を自己の条件として、資本は「自己活動的に増殖する」。資本は生産手段を増大し、空前の富を産出する。「資本主義的経済の基本傾向は、最小の力で最大のものを生産することにある⁽¹⁶⁾。」自由競争、資本の集中、賃労働者の増加が進行する。生産手段から切り離された労働者にたいして、「生産したものの量に応じてではなく、もっぱら彼らを維持するのに必要なものの最低量に応じて」賃金が支払われ、「社会に在庫品があふれるなかで、支払い不能の顧客が生ずる」。ディーツゲンが、市民社会の理論的認識においてその歴史性をもつかむというとき、彼の念頭におかれていたのはなによりも資本の蓄積法則であったと思われる。ディーツゲンが『資本論』の刊行以後最初に書いた「社会問題」と題する論文（1868年2月）のなかで彼が最も注目しているのもこの問題であった⁽¹⁷⁾。労働生産力が発展するにともなって、生産手段に投下されるところの「先立ってなされた労働ないし価値」が増加するという法則が一般的に成り立つ。「生産物は増大するが、しかしこの増加にたいする労働の関与はますます減少する」。かくして、「生産の成長は、大多数の人々の消費能力の成長よりも急速に進む」ことになる。資本の展開が、「その頂点において、自己の補完部分の欠落する」事態に直面し⁽¹⁸⁾、それと共に賃労働者の階級を発展させていくという点にこそ、資本の歴史的有限性とその克服の主体的条件が表現されている——このような把握のうちに、ディーツゲンにおける理論の「科学性」と実践的なものとの接点が認められうるとすれば、それはマルクスの理論構造を前提としてのみ可能になるものといわねばならない。

しかしそれにもかかわらず、ディーツゲンの社会理論がこうした理論構造に同化しきっているということとはできないのである。その点を、彼のおかれた所与の状況、論理の構造および社会主義観に即して検討していこう。まず特徴的

なことは、資本制社会としての把握と商品論的レベルでの把握との間の二元性であろう。そこには、彼の市民社会観が、すでに『経済学批判』の商品論を基礎に一端形どられていたという事情⁽¹⁹⁾も一定の役割を果たしているかもしれない。だが何よりも決定的であったと思われるのは、ディーツゲンにとって運動の主体となりえた存在が、直接的には、資本によって再生産的に措定される賃労働者の階級ではなかったという状況の問題である。少なくとも彼の直接の記述にあらわれてくるのは、「大工業に脅かされて自己の独立の維持が日ごとに困難化している小市民」、あるいは賃労働者へと没落する小生産者といった過渡的存在である⁽²⁰⁾。この現状から出発して社会主義へと方向づけるために、一方では資本とプロレタリアートの理論的構成が、他方では現状批判が媒介とならねばならない。まず彼は、「市民的に自立的な労働から産業的賃労働への転化は市民社会の固有の生活＝発展過程をなす⁽²¹⁾」、という論理をとおして小生産者の利害を理論的に否定し、すでに「今日の小経営はアナクロニズムであり、のり越えられた立場である⁽²²⁾」、と断ずる。こうして——ディーツゲン自身がそうなのだが——現実には「中間階級に」属しているにもかかわらず、自己の直接的利害を否定して、「理論的に、プロレタリアートに」属するのでであると自覚する⁽²³⁾。そのかぎりにおいて、マルクスの資本の論理はディーツゲン自身の自覚の論理でもなければならぬ。他方現状批判は商品生産社会の無政府性に向けられる。小経営はアナクロニズムだとする批判によって小生産者の立場が理論的に否定されているかぎりでは、ディーツゲンにとって、現状に内在しうる立場として唯一残されているのは直接生産者、あるいは肉体労働者として⁽²⁴⁾の立場のみであったということができようか。現状にふみとどまって現状批判をこころみるかぎり、それは、肉体労働者の根源的主体性、の自覚にもとづいて、現状の主-客転倒性および労働の社会化の無意識性にたいしておこなう批判となる。そのような現状批判にひきつけられるとき、資本の把握も、その固有の形態規定の展開から離れ、むしろ労働と資本とが悟性的に対置させられる。その意味でディーツゲンは資本を「労働手段」と規定して生きた労働に対置する。「資本とは、……人類の労働によって自然的素材から創造され、しかも人間労働力を支配し、自立的価値ないし富を産出するほどの

優越性に達した物質的労働手段のことである。」⁽²⁶⁾

しかし、労働の共同性が存在論的にいかに根源的であり、そこに人間の主体的実践の源泉があるとしても、またそれだけ一層現状批判の立場として深いものがあるとしても、それをもって市民社会の変革の実践原理とするならば、すなわちこのような労働概念に内含される主体性において革命的実践の原理もつかみうると考えるとするならば、そこにはふたたびカント実践原理におけると同じ問題が立ちあらわれてこないであろうか。そのような実践原理は現実の「彼岸」にとどまっているのではないかと。たしかに労働は、カントの叡智的な理性と異なって、感性的活動であるといえよう。だが労働は、労働一般として資本制社会における現実的契機をなしているわけではない。資本制生産は「資本関係そのものを、一方には資本家を、他方には賃労働者を、生産し再生産する⁽²⁸⁾」のであり、労働する諸個人は、この関係のなかでは、自己の労働をとおして資本関係をひとつの「自然」として再生産するより以外にない。ここに、資本制社会の変革における理論と実践の統一にたいして階級としてのプロレタリアートのもつ意味があったとするならば⁽²⁷⁾、ディーツゲンの市民社会批判の二元性の問題は、彼にとって所与の現実そのもののもつ二元性の表現であるとも考えることもできるのではないだろうか。

ここで問題の方法的、論理的側面をみることにするならば、それはディーツゲンのカント批判の論理にかかわってくる。ディーツゲンがその労働概念において主-客の実践的關係、自己産出的過程をとらえたことはすでにみたところである。ところでカントの「物自体」=無条件者こそ、ある与件にたいする「諸条件の総体⁽²⁸⁾」として、産出的原理であった。しかしディーツゲンは、第2節においてみたように、物自体概念の有するこの側面をつかむことなく、それを、可想体であることをもって否定し去ったのであった。そのことが、実践、それも自己再生産的現実の変更にかわる実践の論理構造の把握に、一定の方法的困難をもたらすことになったといえないであろうか。ディーツゲンの場合、主体-客體の実践的構造は、歴史哲学的に、抽象的には把握しえたとしても、市民社会の現実という特定の総体の論理において、すなわち措定しかつ措定される現実の諸契機の連関において、方法的に一貫して把握されることは

なかったと思われる。マルクスが、ディーツゲンの「弁証法」によせて、ヘーゲル研究の問題に言及した所以もここにあると考えることができよう。

そのことを思惟理論における普遍概念に即してみるならば、ディーツゲンにおいて思惟は、究極的には、抽象と解されている。まえに述べたように、彼においても普遍が重層化されるかぎりにおいては、そこに理論的構造化が可能になる。しかしそれはいわば「悪無限」的に開かれており、総体的現実の再構成（具体的普遍といってもよい）の視点を欠いている。これにたいしてマルクスの場合、資本制社会の現実、思惟において、資本の自己再生産構造において再構成され、現実の変革を担いうる実践主体も、この再構成のなかで、現実の契機に組みこまれたものとして把握されることになる。ディーツゲンにおいては、思惟のつかむ普遍はいずれも抽象であり、どのような普遍も直ちに、感性的には具体として存在すると解される。そのような意味で、彼の場合、「物を完全にとらえようとするならば、それを実践的かつ理論的に、頭脳と感官で、肉体と精神とでつかまねばならない」⁽²⁹⁾のである。

労働の共同的本質も抽象的普遍であり、それは感性的具体的には肉体労働者の私的諸労働として実存する。共同性を共同性として直接的に実現しうるかどうかは、まさに肉体労働者の自覚による。だがまさにそれが、感性的実存の変更であるかぎり、彼の思惟理論の静態的統一は破られる。理論的に先取りされたプロレタリアートの論理によって媒介されることなしには、彼は共同性実現の方向性をもちえなかったといえよう。こうした二元性をふくみつつ、ディーツゲンにおいて、現存の肉体労働者が革命の主体となる。あるいはむしろ、主体としての意識化と共に革命過程が始まると考えられているといえよう⁽³⁰⁾。それは長期にわたる過程であるが、⁽³¹⁾ たんなる知的啓蒙の過程ではなく、また政治権力の掌握に収斂するものでもなく、生産手段の所有形態の変更で終わるものでもない。それ以上のものである。彼において社会主義とは、究極的には、「大衆が自己意識的になる⁽³²⁾」こととして、歴史におけるひとつの飛躍を意味したのである。

以上、ディーツゲンの思想を社会理論を視野におさめて考察してきた。労働者の頭脳労働をとおして共同社会への道を切り開こうとした彼の構想は、彼が

マルクスからつかみ取った労働概念にもとづく社会の主体的把握を核とするものであり、そこにおいて彼はカント二元論の批判的克服に迫りえた。しかし、彼のカント批判における一つの空隙——物自体の問題は、彼の市民社会批判における理論と実践の連関把握に一定の方法的制約をもたらすことにもなった。われわれはディーツゲンの思想のうちに、ドイツ社会民主主義におけるカント-マルクス関係史に属する諸問題が先取りの含まれていたことをみることができるのである。

(注)

- (1) Dietzgen, National-Oekonomisches, in: *Der Volksstaat*, 1. Jan. 1870.
- (2) Dietzgen, Kapital von Marx, in: *Demokratisches Wochenblatt*, 22. Aug. 1868.
- (3) Dietzgen, Der wissenschaftliche Sozialismus, in: *Der Volksstaat*, 26. März 1873.
- (4) カントによれば、行為は、その規定根拠が自然にあるか自由にあるかに従って、「技術的」なものと「道徳的」なものにとに区別される。彼において、本来の意味での実践は、理論と峻別されて、道徳的なものと解されていた。Vgl., Kant, *Kritik der Urteilskraft*, hrsg. v. K. Vorländer, S. 7.
- (5) Vgl., Gerhard Huck, Zum Verhältnis von Theorie und Praxis bei Heß, Lassalle, Lange und Dietzgen, in: *Arbeiterbewegung an Rhein und Ruhr*, hrsg. v. Jürgen Reulecke, Wuppertal 1974, S. 49.
- (6) たとえば次のようなことばを参照。「社会民主主義の自信は、進歩のメカニズムにもとづいている。」「われわれは自己の救済が……世界の不可避的進展から機械的産物として生まれ出てくるのを見る。」(Dietzgen, *Sozialdemokratische Philosophie*, in: *Der Volksstaat*, 9. Jan. 1876.)
- (7) Dietzgen, National-Oekonomisches, in: *Der Volksstaat*, 1. Jan. 1870.
- (8) Dietzgen, Kapital von Marx, in: *Demokratisches Wochenblatt*, 22. Aug. 1868.
- (9) *Ibid.*, 1. Aug. 1868.
- (10) マルクス『資本論』, 邦訳『全集』第23巻, 99頁。この「二重の社会的性格」とマルクスの方法の関係については、平子友長「マルクスの経済学批判の展開方法——素材一形態関係の把握と関連させて——」, 『現代資本主義と国家——経済理論学会年報第17集——』所収, 参照。
- (11) Dietzgen, Die bürgerliche Gesellschaft. Ein Vortrag, gehalten vor freireligiösen Arbeitern des Wupperthals in Elberfeld-Barmen, in: *Der*

- Volksstaat*, 25. Sept. 1872.
- (12) Dietzgen, National=Oekonomisches, in: *Vorwärts*, 2. Febr. 1877.
- (13) Dietzgen, Einige Worte über das Wesen des Geldes, in: *BzG.*, Jg. 15, 1973, S. 76.
- (14) ディーツゲンの把握が同時代の労働者による『資本論』理解としてマルクス自身の注目をひくものであったことについては、たとえば『資本論』第2版後記(前掲邦訳18頁)を参照。なお、そこに言及されている「諸論文」の一つとしては、Offener Brief an Heinr. v. Sybel, in: *Der Volksstaat*, 17. Apr. 1872, も無視しえぬ文献である。
- (15) Dietzgen, National=Oekonomisches, in: *Der Volksstaat*, 26. März 1870.
- (16) Dietzgen, Kapital von Marx, in: *Demokratisches Wochenblatt*, 5. Spet. 1868.
- (17) Vgl., Dietzgen, Die soziale Frage, in: *BzG.*, Jg. 15, 1973, S. 84.
- (18) Dietzgen, Kapital von Marx, in: *Demokratisches Wochenblatt*, 5. Sept. 1868.
- (19) 1866年12月から67年3月にかけて発表された論文, Einige Worte über das Wesen des Geldes, in: *BzG.*, Jg. 15, 1973, S. 75-80, 参照。
 なお、ディーツゲンが『経済学批判』を、その刊行当時に「きわめて熱心に」研究したことについては、vgl., Dietzgen an Marx, 24. Okt./7. Nov. 1867, in: Joseph Dietzgen, *Schriften in drei Bänden*, Berlin 1961-1965 (以下 *Schriften* と略記), Bd. 3, S. 399.
- (20) Vgl., Dietzgen, Die bürgerliche Gesellschaft, in: *Der Volksstaat*, 25. Sept. 1872.
- (21) *Ibid.*
- (22) Dietzgen, National=Oekonomisches, in: *Der Volksstaat*, 30. März 1870.
- (23) Joseph Dietzgen an Eugen Dietzgen, 23. Aug. 1882, in: *Gesammelte Schriften*, Bd. 3, S. 43.
- (24) ディーツゲンにおいてこの「肉体労働者」を表わすことばが *Handarbeiter* である。第3節でみたように、頭脳労働と肉体労働、その分離の克服という視点が彼の労働論を貫いているが、その関係を彼は、*Geistige- und körperliche Arbeit, Wissenschaft und Handwerk, Kopf- und Handarbeit*, 等の対概念で表現した。ディーツゲンの *Handarbeiter* は主体としての自覚の立場を意味している。
- (25) Dietzgen, Arbeit und Kapital, in: *BzG.*, Jg. 15, 1973, S. 85.
- (26) マルクス『資本論』, 前掲訳書753頁。
- (27) Vgl., G. Lukács, *Geschichte und Klassenbewußtsein*, Sammlung Luchter-

hand 11, S. 111-112, 城塚・古田訳 88-89頁。

- (28) Kant, *Kritik der reinen Vernunft*, B. 379.
- (29) Dietzgen, *Das Wesen der menschlichen Kopfarbeit. Dargestellt von einem Handarbeiter. Eine abermalige Kritik der reinen und praktischen Vernunft*, Hamburg 1869 (以下 *Kopfarbeit* と略記), S. 21, 森田訳 32 頁。
- (30) それは「現存権力にたいする奇襲からではなく、大衆の社会民主主義的認識から」生ずる。(Dietzgen, *Die Zukunft der Sozialdemokratie*, in: *Sozialdemokratische Bibliothek*, Hottingen-Zürich 1885, 1. Bd., Heft 3, S. 6-7.
- (31) ディーツゲンはマルクスへの手紙の中で、「今世紀中も、またおそらくこの次の世紀もなお、世界史を進めるのは意識であるよりも本能なのではないか」と記している。(Dietzgen an Marx, 20. Mai 1868, in: *Schriften*, Bd. 3, S. 408-409.)
- (32) Dietzgen, *Kopfarbeit*, S. vii, 邦訳10頁。

(筆者の住所：東京都目黒区大橋 2-12-20)